

帝具が暴走して好感度
カンストしちゃった

鹿里マリオウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貧しい故郷を救うため帝都にきたタツミは帝都の闇に触れナイトレイドに入る。帝国を変えると意気込んで一週間で致命的な事件が起こっちゃった話。

目次

帝具が暴走して好感度がカンストし ちやつた？アカメ、シエーレ	1
帝具が暴走して好感度カンストしちやつ た？マイン、レオーネ	9
定例会議？ナジエンダ、ラバック、ブラー ト	20
好感度カンスト済みだった	26
これ俺の村のしきたりだから	36
はじめてのにんむ？（デートとか言わな いで）	52
シエーレさんと訓練（訓練です。えっち なプレイじゃないです）	64

帝都までお散歩（直諭）& a m p 全ての
流れを変えるセリューちゃん ——— 75

帝具が暴走して好感度がカンストしちゃった？アカメ、
シエーレ

？かつての活気に満ち溢れた帝国は見る影もなく腐り果てた。

？ 圧政により広がった格差は最早どうしようもなく、街を歩けば沈んだ表情のならず者達が多く見受けられる。笑い声といえ、肥太った貴族の下卑た笑いか、路地裏から響くチンピラのものかのどちらかだ。

？ なればこそ、革命を起こそうというのはごく自然の心理だろう。

？ しかし腐り果てても帝国は帝国、一筋縄ではいかぬもの。

？ だからこそ、彼らがいる。彼らが斬る。

？ 彼らの名は、暗殺集団（ナイトレイド）。

？ ■ ■ ■

「………暇だな」

? ナイトレイドのアジトで、俺は地面に寝っ転がって天井を眺めている。
? かれこれ数時間この体勢で時間が過ぎた。

「暇だ」

? 俺の名前はタツミ。

? 帝都で武勇を上げて貧しい故郷を救おうとした男。

? でも予想以上にドロドロでびっくりしちやってます。

? 色々あつてナイトレイドに入つて一ヶ月経ちました。

? この一ヶ月で俺が受けた依頼、実にゼロ件!

? 嘘やん。もう居ないのと同じじゃん。

? 入った当初は稽古をつけてもらつてた。

? 任務もこなしていくつもりだった。

? あの事件が起きるまでは、

? 入団から一週間、ナイトレイドにとある帝具が届いた。差出人は革命軍。

? 見た目は真つ赤なハート型の宝石で、些か少女趣味過ぎるものの、澱みない真紅の色が目を引いた。

?ボスことナジエンダさんは出払っていてアジトにはいなかった。

?その場で帝具がないのは俺一人だが、流石に新入りに扱えるものではない。

?ナジエンダさんが帰ってき次第適性を計り、合えば使うし合わねば送り返すと話が纏まったそのときである。

?帝具が震え出した。

?他のメンバーは即座に警戒体制に入ったが、俺だけは反応が遅れてしまう。

?その隙を逃さぬように、ハートの帝具は俺の胸へと一直線に飛び込んできて、そのまま体の中へと潜り込んで姿を消した。

?が、異変はそこで終わらない。

?内側からナニカが溢れてくる。完全に帝具が暴走していた。

?必死に押さえ込もうと叫んでも、爆速で湧き上がってくるナニカには焼け石に水のようにうだ。

?ナニカが、勢いよく体外へと放出された。

?帝具の名は“絶対恋愛カーマデーヴァ”。

?能力は、“異性からの好感度を上下させる”こと。

?
■
■
■

?という訳で、あの日外出していたボスを除く女性陣からの好感度がアゲアゲ状態になってしまったようで、任務どころか、アジトの外へ出ることも禁止され、訓練も怪我したら危ないだとかで一切させて貰えない始末。腹筋腕立てが限界ラインと言われた。イカれてやがるぜ。

「.....暇だなあ」

?ずっと家の中で一ヶ月過ごしている。完全に紐となつてしまった。ぴえん。

?ダメ人間という事実に打ちひしがれていると、玄関のドアが思いつきり開かれる。壊れそうだからやめて欲しい。

「タツミ、帰ったぞ!!」

?現れたのはアカメだ。

?帰ってくんの早くね?つい数時間前に任務で出ていったばかりなのだが。

?メタくそ息切れしてるところから察するに、超ダツシユで行つてサクツと刺して超ダツシユで帰ってきたのだろう。暗殺RTAでもしてるのでしょうか。

「今日も悪者を殺したぞ。どうだ？偉いか？」

「な？偉いか？な？タツミ？と俺を目視した途端擦り寄ってくる。ハイライトは消えている。」

「あの凜々しいアカメは何処に行ってしまったんだ。」

「……た、タツミ？足りなかったのか？だ、大丈夫、もつと殺してくるから、もつと役に立つから、な？タツミ？誰か嫌いな奴とかいないか？私に任せてくれれば直ぐに消してくるぞ。あ、マインとかどうだ？アイツ当たり強いだろう？な、葬ろうか？命令してくれタツミ、今すぐ葬りに行くからな」

「何も言わない俺を不安に思ったのか、アカメがとんでもないことを口走り始めた。」

「昔のアカメを思い出してたら目の前で仲間を殺害する計画練り始められることある？」

「アカメは今見た通り精神がとてつもなく不安定だ。だから一層のメンタルケアが必要になる。それが俺の最近の役割だった。」

「おーよしやしやしやしやしや。大丈夫だから落ち着けー。仲間殺そうとしないでー」

「んあつ♡た、タツミ？どうしたんだ？」

「アカメはとりま頭撫でとけば落ち着くという研究結果がでている。チョロいなこの子。」

「ちよ、ちよつと．．．んつ、タツミ?．．．ふあ♡んう、ひや、．．．あ
あ!まつて♡♡そこ、だめえ♡」

?．．．．．なんかエロくね。

「ふあああ、タツミい、すき♡♡すきすきすきすきすきすきすきすきい♡♡♡♡♡」
?．．．．．なんかエロいね。

「ほら、終わり。風呂入ってきなさい」

?手のひらに頭を押し付けてくるが、切り上げないと永遠に続いてしまう為振りほどく。最近お母さん役が板に着いてきた気がする。．．．いや嬉しくないけど。

「タツミも一緒に入ろう」

「入るかっ!!」

?ごねるアカメをさっさと追い返した。

?多分一緒に入ったら食われるんだろうなって何となく分かる。

?アカメにも困ったものだなあと頭を悩ませていると、今度は後ろから声がかかった。

「．．．．．タツミ」

?振り返ると、紫髪の女性シエーレが穏やかな笑みで立っている。

?．．．．．すっごい怖い。背筋凍る。笑ってるのに笑ってない。

? 怒気、いやもうこれは殺気か、そんなものを発している。

? この様子はずつと見られてたやつだ。

「あ、そんなに怯えないでください。タツミには一切非はありませんから」

? 恐怖に慄く俺に気を使ってくれた。

「……あの雌タツミが困ってるのに擦り寄ってきて挙句の果て頭まで撫でてもらって私だつてして貰いたいのに本当に卑しい雌です。ね神聖なタツミが汚れちゃうから触れないでと何度言えば分かるのでしようそろそろ駆除した方がいいです。ねええそうしましよきつとタツミも褒めてくれます。したら私が頭を撫でてもらって他の雌じゃなくこの私が……うふふ、うふふふふふふ♡♡♡♡♡♡」

? 急に呪詛のような呟きをボソボソと小声で垂れ流し始めたかと思うと次は笑いだした。

? 聞こえなくて良かった内容だろう。

? 完全に自分の世界に入ってしまったシェーレさん。このまま放置しておくとか何をしでかすか分からないため、取り敢えず頭を撫でておこう。

「ええ!? そんなつ、きゆうにつ……んきゆうううううう♡♡♡♡♡♡」

? もう撫で技術が限界突破しているのかもしれない。

? それぐらい即落ちした。

帝具が暴走して好感度カンストしちゃった？マイン、レ
オーネ

？どうもタツミです。

？後ろの影からシエーレさんが発情した目で見ていますが無視して読書に励んでいま
す。

『ストーリーカー被害にあつたらすべき10のコト』という本を上から下までじっくり熟読
する。

「ただいまー」

？ドアが開かれる。

？背の低いピンク髪のツインテール。

？今度帰ってきたのはマインだった。

「ふう、流石に偵察任務だと時間がかかるわね」

？マインは顔が割れていないため、街中の偵察をよく任されるのだ。

「お疲れ様マイン、お菓子あるけど食うか？」

？任務も何も無い俺は、申し訳なささと労い半々でお菓子の積まれたお椀を差し出す。

「ふふ、ありがとう」

?・・・なんだこの優しいマインは。

?マインが俺と並ぶようにソファーに座る。

?やけに近い。というか左半身をさすりつけてきた。

?後頭部に殺気が刺さる。

「何を讀んでたの?」

?手元の本を覗き込んできた。

?その際俺の胸板にほっぺをスリスリするのも忘れない。

「ストーカー被害?・・・ああ、アイツか」

?ここら一带の温度が急激に下がる。

?なのに冷や汗はダラダラだ。

?汗の匂いを異常な嗅覚で感じとったマインが俺の胸に顔を埋めた。

?数回の深呼吸の後、うっとり目じりの下がった表情で出てくると、流れるように彼

女の相棒スナイパー〈浪漫砲台パンプキン〉を構える。

?銃身の先には鬼の形相で奥歯を噛むシエーレさんが、大バサミ〈万物両断エクスタス〉を揺らりと開いて応戦の姿勢をとっていた。

? シエーレさんが目じりに涙を浮かばせて頬を膨らませている。

? そして次の瞬間には物陰へと消えてしまった。

? シエーレさんは一度拗ねると数日出てこない。

? 何か危害を加えてくるという訳ではないからいいっちゃいいんだが。

? じつとタンスの中やら物陰やらから俺だけを凝視してくるのだ。数日間一度も目を

離すことなく。

? 飲まず食わず不眠不休の執念は、流石に恐怖を感じてしまうというものだ。

「なあ、もっと仲良くできないのか?」

? 俺の腕に上半身を押して付けてくるマインに問いかけた。

「別に仲が悪いわけじゃないのよ? むしろ全然いいわ。一緒に任務よく行くし……」

ただ、貴方のこととなるとそれは別問題でしょ?」

? いわく恋情と友情の優先順位だとか。

? よく分からん。

「まあいいや。風呂入ってこい」

「一緒に入る?」

「入るかっ!」

?これはまた変なこと思いついたな。

?以前にも数度同じような兆候があったが、大抵碌でもない内容だった。

?そう今も正しく、レオーネの頭の中では、

?ふ、普通の状態でこんだけヤバイ匂いなら、も、もし帝具で半獣化したら……..
だ、ダメだダメだダメだ!そんなことしたら一発で戻れなくなる!これ無しじゃ生きて
行けなくなっちゃう!……..
?なんてことを考えていた。

?レオーネの中で激しいせめぎ合いが起きている。

?この状態で満足するか、半獣化で嗅覚を強化するか、葛藤の末勝利したのは……、

「……..変身(ライオネル)」

?急にその名を呼び放ったかと思えば、レオーネ姐さんの身体が変化した。

?髪が伸び猫耳が生え、犬歯が異常発達する。両手も鋭い鉤爪を帯びた猛獣のそれになり、最後は可愛らしい猫のしっぽができた。

?可愛らしい猫を思わせる見た目、しかしその威圧感、風格は、猫という言葉では表現
出来ない。正に、百獣の王ライオンの姿だった。

?え?急に帝具使ってきたんだけど。俺殺されるの?

?身体がガクガクと痙攣する。

「んひゅうううう ♡♡♡♡♡♡♡♡♡これっ♡♡やっぱ♡♡♡♡♡♡♡♡頭、おかしきゆなるっ♡♡♡♡♡食べられちゃうううう ♡♡♡♡♡♡♡♡♡あ、あれ♡♡抜け出せにやい♡♡♡♡♡こ、腰抜けてっ♡♡ヤバイ♡♡捕まってる♡♡♡♡♡タツミに捕まってるうう ♡♡♡♡♡」

?余りに強烈な匂いに、レオーネ姐さんの腰は抜け続ける。

「おかしきゆなるうううう ♡♡♡♡♡ダメだよおおお ♡♡♡♡♡ごめんしやいい♡♡♡♡♡ゆるひてっ ♡♡♡♡♡たべにやいでえ♡♡♡♡♡タツミ ♡♡♡♡♡タツミ♡♡♡♡♡負けでいいからっ ♡♡♡♡♡レオーネの無様敗北でいいからっ ♡♡♡♡♡ごめんしやいするからっ ♡♡♡♡♡♡♡♡♡たしゆけてえええええ ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?一際大きく叫んだかと思うと、レオーネ姐さんはパタリと倒れる。

?気絶してしまったようだ。

?この人一人で何やってんだ。

?勝手に匂いを嗅いできて勝手に興奮して勝手に何かに負けて勝手に意識失ったレオーネ姐さんに困惑しかない。

?・・・取り敢えず風呂はいつてこよ。

?俺ってそんなに匂いキツイのだろうか・・・。

？ちなみにその後、レオーネはタツミとすれ違ふときの微かな匂いでさえあの時の記憶が蘇り、一人悶絶する日々を過ごした。

定例会議?ナジエンダ、ラバック、ブラート

? ナイトレイドのアジト。その一室で、タツミ、ラバック、ブラート、ナジエンダが机を囲っていた。

「ではこれより、定例会議を始める」

? ナイトレイドのボスであるナジエンダが緊張感ある声音で言い放つ。

? 『定例会議』、元々はナイトレイド全員で現在の課題と今後の方針を話し合う会だったのだが、アカメたちがあの調子になってからは、タツミ、ラバック、ブラート、ナジエンダの正常組での会議へと変わった。

「まず私よりへカーマデーヴァの修復方法だが、現状はまだ見つかっていない。如何せんタツミの身体から取り出すこともできないため、革命軍も手を焼いているのだ。すまんが今暫く我慢してくれタツミ」

「いや全然大丈夫です。元はと言えば俺のせいみたいな所ありますし」

? 申し訳なさそうな眼差しを向けてくるボスに首を振る。

? すると横のブラート^兄が口を開いた。

「別にタツミのせいじゃねーよ」

「あれは事故だ事故」

「続けざまにラバックも首肯する。」

「みんな……」

「最近仲間割れしかない奴らの中心にいたからか、仲間を気遣う心というものに感動してしまった。」

「では次に、タツミから最近のアカメたちの様子を聞こうか」

「三人の視線が集まる中、俺は最近の様子というものを思い出してため息をこぼした。」

「アカメは任務がある時は一瞬で終わらせて俺に褒めて貰おうとしてくるな。休みの日は料理作って褒められようとするんだけど量が多すぎて食いきれねえ。」

「シェーレさんは……数日前に拗ねてから見てないな。まあ今も視線は感じるからどっかから見られてることは確かだけど。」

「マインは妄想に磨きがかかってきて、宇宙の創成と俺の関係を熱く語ってきた。」

「レオーネ姐さんはなんか最近すれ違う度腰が抜けてんな。これは俺も何でかわからん。」

「あと最近一番困ってるのがアジト内での乱闘で帝具を持ち出すようになったことだ。いつ死ぬか気が気じゃない。特にアカメのやつ」

「一通り話終えると会議には重苦しい沈黙が訪れた。」

「まあそこは嚴重注意をするが……しかし、あれだ、一つだけこの状況で良くなつた点を上げるとしたら、アカメたちの戦果が著しく上がっていることだな」

? 確かに彼女達の近頃の仕事ぶりには鬼気迫るものがあった。

? 今まででは戦鬪を楽しむきらいがあったレオーネも、タツミと早く会いたいからと一撃で対象を仕留めて帰ってくるのだ。

? 何とか場を盛り上げようと苦し紛れに出た意見ではあるが、そこそこに価値のあるものではあつた。

「はあ、やはり解決は当分かかりそうだな。特にタツミには苦勞をかけて申し訳ないが、今は要觀察を続けるしかない状態だ。私も何とかならないか探してみるので、皆も頼む。では次の議題だが——」

? 大した実りもないままカーマデーヴァの議題は終わってしまふ。

? 解決策は明確で、カーマデーヴァを直すこと。しかしそれが何よりも難しい。

? 頭を抱えるには充分過ぎるほど難しい問題だ。

?
■
■
■

「お前も大変だなー」

? 会議終了後廊下を歩いていると、途中でラバックに声をかけられる。

「なんか息抜きになる本でも貸してやろうか?」

? 謎にニヤけ顔をして肘でつついてくる。

「どんな本があるんだ?」

「おお! 興味あるか。俺のイチオシ本を紹介してやる。 タイトルは『おっぱ

——」

? その単語を口に出そうとした瞬間、背後からナイフが飛び出して、ラバックの頬を掠めた。

「——今、ご主人様を汚そうとしましたか?」

「. あ、あははは。よ、用事を思い出しちゃったー」

? 頬をひきつらせながらラバックがそそくさと撤退する。

「あ、シエーレさん」

「ご主人様、こんにちは♡」

? シエーレさんが物陰から出てきた。

? 数日ぶりに目を合わせる。

「……今日も、あの女の所に行くんですか?」

「まあな」

? “あいつ”のことを思い出すと、どうしても気持ち沈んでしまう。

「ご主人様の行動に口出しはしません、警告しておきますね。あの女、気をつけた方がいいですよ。どうにも、勘が騒ぎます」

「え?」

? シエーレさんが珍しく神妙な顔つきで答えた。

? “あいつ”が、危険?

「では私はこれで失礼します。くれぐれもお気をつけて」

? シエーレさんはそれだけ残すと再び物陰へと消える。

? シエーレさんの真意を探ろうと頭を巡らす、やはり答えには辿り着けない。

? そうこうしてる内に、アイツの部屋の前に着いた。

? 疑問符を浮かべたまま、俺はアイツの部屋の戸を叩く。

? 中から「どうぞー」と元気な返事が届いたのを聞き、ドアを開く。

? アイツが、ベットの上に座っている。

? 艶のいい長い黒髪と、同色の瞳。

? 俺が来たと気づいた途端、花が咲いたような無邪気な笑みを浮かべてくれた。

? 本来、こんな幼い印象は受けぬ筈の相手。

? 記憶の中の彼女は、もつと凜々しい存在だった。

? それでも彼女がこうなってしまったのは、あのクソ貴族のせい。

? アイツらの薬のせいで彼女の成熟した心は粉々に碎かれ、幼児のものへと変貌してしまつた。

? 込み上げてくる吐き気を悟られないように無理に口角を引きあげて、俺は彼女に声をかける。

「こんにちは、サヨ」

「うん、こんにちは！おにーちゃん！」

? その笑顔が、また俺の心を抉る。

好感度カンスト済みだった

「おにーちゃん、だいすきー♡」

? 俺がベッドに腰かけると、サヨはあどけない笑顔で抱きついてきた。

? とても満足気な笑顔に心が洗われると共に、チクリと痛む。

? 変わってしまった幼馴染。この姿こそが、俺の帝国への恨みの象徴だ。

「えへへー、おにーちゃん♡おにーちゃん♡」

? 溢れんばかりの笑顔に、俺は故郷を出てからのことを思い出していた。

? あの悲劇のことを。

? 辺境の村で生まれた俺たちは、いつも幼馴染三人で駆け回っていた。

? 狩りの仕方や剣の扱いも共に学んだ。

? そして帝都で軍に入り、名を挙げて貧しい故郷を救うんだと意気込んで村を出る日の

朝、最初の悲劇は起きた。

? 幼馴染の一人、イエヤスが食中毒にかかり一緒に行けなくなっちゃった。

? もう食中毒は治ったのだろうか。心配だ。

? 早くも一人の仲間が欠けてしまった俺たちは、それでも帝都を目指す。

? 時間が経てば経つほど故郷は貧しくなる一方なのだ。

? そしてその夜、野宿をしている時に二つ目の悲劇が起きた。

? 盗賊に襲われた。

? 何とか逃げきれたものの、俺はサヨとはぐれてしまう。

? 仕方なく一人で帝都に向かい、その後合流しようと思った。

? 三つ目の悲劇は帝都に着いた直後の出来事だ。

? 有り金全部盗られた。

? もう散々過ぎる。

? その時たまたま会ったレオーネ姐さんに、騙されてお金を全てぶん盗られた。

? 故郷の人がどんだけ頑張って集めたと思っているのだろうか。

? 思い出したら腹たってきた。この事についてまだ何も謝られてないし。

? 後で抗議しに行こう。

? そして最後の悲劇、最大の悲劇。

? サヨが、薬漬けにされていた。

? 路頭に迷っていた俺はたまたま通り掛かった貴族に拾われ、護衛の職を貰った。

? しかしその貴族は、俺のような何も知らないガキを騙して雇い、地下室で拷問するこ

とが趣味のバイオレンス一家だったのだ。

? ある夜、その糞貴族をナイトレイドが襲撃する。

? 襲撃時の俺は、貴族の娘の護衛をしていたが、そこで地下室を目撃、その中には鎖で拘束されたサヨがぐったりとしていた。

? すぐさま護衛対象を首ちよんぱしてサヨを助けるが、意識不明の重体。その貴族は、表に出回っていない凶悪な薬をサヨに飲ませたらしい。

? 連れ去られたナイトレイドのアジトで、何とか一命を取り留めて目を覚ましたものの、ご覧の通り幼児退行してしまっていた。

? 以上が今までの流れだ。

「おにーちゃん、ぎゅってしてー♡」

「お、おう」

? 子供の頼みは断れないが、体つきに成長が見られるためドギマギしてしまう。

「ぎゅー♡」

「は、ははは、よしよし」

? この子は子供この子は子供この子は子供。

? 煩惱退散しよう。サヨは妙に勘のいいところがあつたから、劣情を抱けば直ぐにバレ

てしまうかもしれない。

? 子供をあやすイメージを脳内に巡らせながら撫で回す。

「——んっ、はあ♡すごっ♡」

「え?」

? 一瞬サヨから子供の雰囲気が抜けた気がした。

「う、ううんなんでもないよ。おにーちゃんのだデナデすきー」

「そうか? ならもつとやってやる」

? ちよつとサヨの幼児退行を治す兆しが見えた気がしたんだが、気の所為だったようだ。

「んひやつ♡も、もつとー、ナデナデもつとー♡♡」

「サヨは本当に撫でられるの好きだな」

? サヨを撫であやしていると、後ろのドアが開かれた。

「タツミ、入るぞ」

? 機嫌が悪いのだろうか、アカメは返事すら待たずにドアを捻る。

? てかここサヨの療養室なのに俺に入室許可求めるのどうなんだろうね。

? アカメは無表情で入ってきたが、気持ちよさそうに撫でられるサヨを一瞥し、微かに眉を顰める。

「…………おにーちゃん、ぎゅーして？」

？明らかに刺々しいオーラを放つアカメなど気にもとめず、サヨは以前甘えん坊モードでねだってくる。

？勤の良さどこ行つたんだよ。いやぎゅーするけど。

「ん〜♡♡」

？本当に幸せそうに喉を鳴らすサヨに、こつちまで嬉しくなってくる。ギャップ萌えというものも働いているのだろう。

？治したいよ？幼児退行治したいけどね？…………でももうちよつと幼女サヨ堪能したいじゃん？

「……………フツ」

？サヨが小さく鼻を鳴らした。いや、今のはむしろ鼻で笑ったという感じな気がするが…………幼女サヨがそんなことするわけねえか。

「ツ!!」

？暫く抱き合つたまま動かずにいると、背後で奥歯噛み砕いたんじやレベルの歯ぎしり音が響く。

？疑問に思いサヨを離すと、アカメが鬼もかくやといった表情で睨みつけてきていた。チビリそう。

「あれれー？アカメさんお顔がこわいけどどうしたのー？」

「……タツミ、少し出ていてくれないか？」

？急に火花を散らし始める二人。これが女の戦いというものだろうか。

「ま、まあいいけど」

？流石にアカメも病人には手を出さないだろうと部屋を後にする。

？あの場には男が居てはいけない雰囲気だった。別に怖かった訳では無い。

「お？タツミじゃねえか、どうしたんだ？」

？通りすがりのブラートの兄貴。

「いやあ、女の戦いから追い出されちゃって」

？苦笑いで答えると、兄貴は考える素振りをしてから不敵に笑う。

「タツミ、お前最近ストレス溜まつてるだろ。俺が発散させてやるよ。男同士の戦いつ

てやつだ」

？兄貴がいい笑顔でにじりよってくる。

？この後めちやくちや腹筋腕立てした。

？盛り上がって模擬戦までやってたらマインに見つかってとんでもなく怒られた。マ

インこわい。

インこわい。

？
■
■
■

？タツミが去った部屋で、サヨとアカメは激しく殺意をぶつけ合っていた。

「お前、幼児退行などしていいないだろう」

「あれ、バレちゃった？」

？タツミが聞けば度肝を抜かれるであろうアカメの問いに、サヨは隠す気もなく呆気からんと返す。

？先程までの構ってちゃんな雰囲気は霧散し、言葉には酷く理知的な光が宿っていた。

？しかし反対にその双眸に光は無く、ドロリとした「黒」が渦巻く。

？アカメはその異常性を敏感に感じとる。

？ほんの少し前は人畜無害な振る舞いだっただけの女に、全神経を使い警戒を敷く。

？・・・強いの。

？恐らく、互角。

？殺意を交錯させたからこそ分かる相手の力量。

?アカメの本能は目の前の女を己と同等の敵だと告げる。

?これはサヨしか知らない事実だが、彼女は生まれた時から才能の塊だった。天才などという生半可なものでは無い。怪物と恐れられる類いの才能。

?彼女が五歳になった時、村一番の剣士と名高い男の剣技を全て見切っていた。恐らく戦いになれば、一瞬でカタが付いただろう。

「いやーにしても運が良かったなー。まさかこんな形で夢が叶うなんて」

?サヨには一つ夢があつた。

?ずっとずっと昔、それこそ幼少期と呼ばれる時代からの夢。

?「タツミの妹になって甘えまくりたい」

?一見すると馬鹿な夢だが、二見しても馬鹿な夢だ。

?だが彼女には、とんでもなく大きな野望。

?最初こそ小さな夢、小さな恋心だったのだが、時を経て想いは降り積もっていき、やがてその蓄積は「病み」と称される高みまで辿り着いてしまった。

?守つてもらうために自分を弱く見せた。力を大幅に抑え続けた。

?しかし、全ての行動の要因がタツミ主体のものと変わつても、野望が身を結ぶことはない。ただ仲のいい幼馴染として見られる日々が続くだけ。

? 運命の転機はきつとあの時。

? 帝都に向かう道すがら、盗賊に襲われタツミとサヨは分断された。

? タツミの前では力を見せる訳にはいかないサヨは、やむ無くその別れを許す。

? その後タツミが完全に離れきった瞬間、盗賊全員を数秒で片付け、悪態をつきながら帝都に足を進めた。

? 途中、貴族の馬車と出会う。

? 馬車から出てきた貴族は柔和な笑みで帝都まで送りましょうかと尋ねてきたが、サヨはその笑顔の歪みと、消しきれぬ血の香りに気づく。

? 明らかに良くないことを企んでいる。

? そして、サヨは神がかり的な妙案を思いついた。

? 攫われたら、助けに来てくれるのでは?

? 助けられた時幼児退行してるフリすれば、妹と扱ってくれるのでは?

? サヨは嬉嬉として馬車に乗り込んだ。

? その後色々拷問されるが、精々汚れが付くくらいで傷一つつかず、劇薬と紹介された薬を苦もなく耐えきり、無事作戦は成功、彼女の夢は果たされたのだった。

「だからあんまり邪魔しないでくれるかな? ウザイんだよねお前ら。後から出てきておにーちゃんに擦り寄ってさー」

「その性格をタツミにバラしてやろうか？」

「ハッ、勝手にどうぞー？でも優しいおにーちゃんはサヨのこと疑ったりしないから」
「・・・・・・・・」

？バツチバチの火花が暫く散っていた。

これ俺の村のしきたりだから

? タツミがブラートの兄貴との熱い筋トレを終え浴場で身体を流している頃、一人の女性がフラフラと覚束無い足取りで更衣室の扉を開けた。

? 彼女の視線の先には、タツミの汗がたつぷりと染み付いた練習後のシャツ。

? ゴクリと大きく喉がなる。

? その姿はまるで、食虫植物の甘い誘惑に誘われた、哀れな虫を想起させるものだった。

「はア、はア、はア♡」

? 荒い獣の呼吸を繰り返して、金髪の女性レオーネは葛藤する。

? さ、流石にこんな事したらタツミに嫌われるんじゃないか? い、いやでもこんな凄

匂いを無視しろなんて生殺しだ!

? 脳内で天使と悪魔が口論している最中、既にレオーネの腕はシャツに向かって伸びていた。

? 頭では否定しても、身体はもう目の前に置かれた極上のスイーツに囚われている。何もせずに行くなどできないことは明白だ。

? そ、そうだ! 元はと言えばこんな匂い醸し出すタツミが悪いんだ! 誘ってるじゃない

か！

？ 思考も暴論で自己保身を固める方向にシフトし、レオーネは口を開いた。

「変身へライオネル」

？ 半獣化、嗅覚が急激に強化される。

？ と同時に、レオーネは膝から崩れ落ちた。

「——んくあつ♡♡♡♡♡」

？ まだシャツとは距離があるが、それでもこの有様。

？ 意識がタツミの色で染め変わる。

？ 件の記憶がじわりと脳に染み込むように蘇った。

？ ……また、頭をぶっ壊されたい。

？ タツミの匂いに脳ミソ掻き回されて、何が自分かも分からなくされて、

？ そして、

？ そしてまた、敗北宣言をしたい

？ 歪んだ欲望が次々に湧いてくる。

「タツミい♡タツミい♡」

？ 最早腰に力が入らず一歩としてタツミのシャツに近づけない。動かない身体をもどかしく思いながら、うわ言のように愛しの名前を呟き続ける。

「——え？何やってんのレオーネ姐さん」
？風呂上がりのタツミと、鉢合ってしまった。

？
■
■

？俺が風呂から出たら、レオーネ姐さんが俺のシャツに手を伸ばしながら更衣室にへたりこんでいた。

？何を言ってるのか分からねえと思うが、俺はだいたい察した。

「た、タツミ!?!これは違うぞ？私は無実——ちよつと待つてタツミの裸ヤバイ……」
？言い訳すらままならない様子。

？タオル巻いてて良かったと今日ほど思ったことは無い。

？洒落にならない量の鼻血を零しながら、レオーネ姐さんが凝視してくる。

？ライオネルで変身していることも相まって、猛獣に睨まれた気分だ。

？恐怖に竦んでから不意に思い出す。

?この状況で責められるべきは確実にあつちであり、また俺にはレオーネ姐さんに金を取られた恨みがある。

?その恨み、ここで果たすことも可能だ。

?再びレオーネ姐さんへと目を向ける。今にも飛びかかつてきそう。

?・・・やっぱ怖くね?

?今は一匹の発情したライオンに食われる寸前。

?正直恨みを一旦忘れて逃げ出したいが、あちらは理性のタガなどとうに外れている。

背中を向けた瞬間、飛びかかってくるだろう。

?腹を括るしかない。

?ここで怖気づいていたら一生恨みを返せないぞと脳内で繰り返す。

?目の前の猛獣に、自ら一步踏み出した。ゆっくりと、隙を見せないように。

?顔を真っ赤に紅潮させるレオーネ姐さんの間合いに入る。

?緊張の一時。

?レオーネ姐さんが、微かに鼻を動かした。

「ふっふっ」

? 目尻が垂れ一瞬俺への意識がブレる。

? 瞬間弾かれたように飛び出した。

? 普段なら軽く捻られるであろう攻撃も、今なら当てれる。

「トウツ！」

? レオーネ姐さんに飛びついて組み伏せた。

? 仰向けに倒されるレオーネ姐さんは、背中から落ちた衝撃で理性が戻ってくる。

「え? タツミ? つ!? ちよ、は、はだ——」

? よし、何とか拘束には成功したぞ!

? え? この後どうすんの?

? 恨みを返すって具体的に何をやればいいのだろう。

「裸だ♡タツミの裸♡凄いや. ふあ♡え、何この匂い。すごい、あつたかい.

♡」

? 恨みを返す。つまりお仕置すればいいのかな。

「汗の強い匂いじゃなくて、風呂上がりのタツミの優しい匂い♡あうう♡♡こっちもすき♡♡」

? 俺の故郷には、お仕置きといえはコレ。というものが一つある。

? 仰向けに押し倒したレオーネ姐さんの上から一旦退く。

? 一応腕は抑えているが、何故だかレオーネ姐さんは上の空状態なのでいらぬ気もした。

? というかろくに抵抗してこないな。

? 俺は正座をして、その上に今度はうつ伏せにしたレオーネ姐さんの腹を乗せる。

「タツミい♡もつと優しい匂い頂戴♡」

? ぶつちやけ何を言っているのか理解できないが、しかし反省していないことは伝わった。これはお仕置きしなければ。

? 大きく右手を引き絞る。

「タツミ?」

? ようやく俺がいつもと違う雰囲気なのを感じとったか、だがもう遅い。

? 俺は思いっきりレオーネ姐さんの尻を引っぱりたい。

? すなわち、おしりペンペンである。

「フンっ!!」

「んぎいッツツ?!」

? 苦悶の音が響く。

「フンっ!!」

「あぐッツツ?!」

「フンっ!!」

「ひぎゅッツツ!!!」

?二度三度、四度五度と続く。しかしその程度では終わらない。俺の故郷では百回やるのが通例だ。

「た、タツミつ、ゆるひて……」

「フンっ!!」

「いぎいいいい!!?!」

「許して欲しい時はなんて言うんだ?」

「ご、ごめんなさい!ごめんなさい!」

「それでいい!フンっ!!」

「んんんんんんんんん!!!なんでえー!?!」

?レオーネ姐さんが涙を浮かべて抗議してくる。しかしここは心を鬼にして続行だ。

「謝って済んだらナイトレイドいらねえんだよ!フンっ!!」

「あぐううううう!!!ごめんなしいい!!!」

? チンピラを演じるのがおしりペンペンのコツだ。

? 乾いたビンタ音と、レオーネ姐さんの悲鳴がこだまする。

? しかしその声は、おしりペンペンが十五を超えたところで変化を迎えた。

「フンっ!!」

「ごめんなさいっ♡」

「フンっ!!」

「ごめんなさいっ♡♡」

? 彼女の悲鳴は、徐々に甘さが混じり嬌声に近くなっていた。

「フンっ!!」

「ごめんなさいい♡♡……なにこれ♡♡……お尻ジンジンすりゆの、ちよっ

と、きもちい♡♡♡♡」

? 微かにだが、レオーネ姐さんはこの行為に快樂を得始めたのだ。

「フンっ!!」

「ああっ♡ごめんなしい♡♡……だめ♡どんどん気持ちよくなる♡♡これだ

めなやつ♡♡♡に、逃げ——」

「フンっ!!」

?彼女の頭の中では快樂の花火が弾けていることだろう。

「フンっ!!」

「(こ)おあっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?シャツとお仕置のダブルブッキング。

?訳の分からぬ気持ちよさに、視界は真っ白、体は痙攣。脳の許容量を遥かに上回り、意識はブツリと途切れる。

「フンっ!!」

「うぎゅひっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?しかし失った意識は俺の平手打ちの衝撃で引き戻された。

?目を覚ますと目の前には俺の訓練後のシャツ。そして絶え間なく襲ってくるおしりペンペン。

?また快樂のキャパオーバーで気絶、起こされる、気絶、起こされるの無限ループに陥る。

「ほら、謝罪は!?!フンっ!!」

「あぎゅうっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡は、はひ♡♡♡♡♡ごめんなしいっっ♡♡♡♡♡」

「♡」

「フンっ!!」

「きゅにゆう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡、ごめんな——」

「フンっ!!」

「あぎひいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ごめんなしいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

? 時折意識がブツ切りになりながらも、喘ぎと共に謝罪を叫び散らす半獣化した女性と、その女性をおしりペンペンし続ける腰にタオルを巻いただけの男。どう見ても事件だ。

? しかし俺は気にせずお仕置を続ける。

? ひたすら無心で叩き続けるのだ。

? 故郷でもそう教わった。変に情をかけてしまえば、味をしめてまた悪さをするかもしれない。どんなに謝っても泣いても、決して手を緩めてはいけない。

? 俺は機械。無慈悲なおしりペンペンマシンだ。

「フンっ!!」

「ごめんなしいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ごめんなしいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

? ■■■

相手を抱きしめる。

「ふああ♡♡優しいタツミだあ♡♡♡♡」

? 消耗の末腕を上げることすらも叶わないレオーネ姐さんは、必死に俺の胸板へ頬を押し付けてきた。

? 頭を撫でてあげる。これもしきたり。

「それすきだあ♡♡優しい匂いもすきい♡♡・・・タツミ♡タツミ♡厳しいタツミも、優しいタツミも、どっちも大好きだぞ♡♡」

? よし、これで後に恨みが残ることはないだろう。

「・・・それはそうとお金は返してね」

? まあこれは別問題だよ。普通にね。

「分かった♡♡私の全財産あげる♡♡」

「いやそんないらねえよ。俺が盗られたのほんのちよつとだぞ」

? 極端過ぎるんだけどこの人。

「違うの♡♡私タツミに二回も手も足も出さず負けたから♡♡♡レオーネタツミに完全屈服しちやつたから♡♡♡私の物全部タツミに貢がなきゃいけないの♡♡♡♡♡♡」

? 胸板から俺を見上げる虚ろな目が、その言葉は冗談ではないと告げている。

?俺は一旦レオーネ姐さんを置いて一人着替える。

?しつかりと服を着たら、超全力ダッシュで逃げ出した。

?だって怖いんだもん。

はじめてのにんむ? (デートとか言わないで)

「帝都の市政調査?」

「ああ、タツミも流石に帝都を知った方がいいだろう。任務がてら観光して来い」
? ナジ^ポエンダ^スさんから外出を提案された。

「でも俺外出ちやダメって決まりじゃなかったっけ」

? 好感度上昇組から理不尽に言い渡された決まり。怖いから守るけども。

「ああ、それに関しては大丈夫だ。なんとたって——」

「私がついて行くからね!」

? 急にマインが扉を開けて出てきた。ずっと待機していたのだろうか。

? というかいつの間にか “外に出ちやいけない決まり” が “一人で外に出ちやいけない決まり” に変わってたんだが。絶対マインの独断だろう。

「シエールとアカメは任務で留守だし、レオーネは昨日酒飲み過ぎて爆睡してるし……完璧ね! さあ、デートに出発よ!」

? デートって言っちゃったよ。

？
■
■
■

「タツミ、あーん」

？任務ってなんだろう。

「……………」

「あーん」

「……………」

「あーん」

？マインオススメだというスイーツ店で、パフェを楽しんでいる。

？こういう場合対面して座るのが普通なんだろうが、マインは俺の隣に座り、肩と肩をくつつけてきた。

？そのせいでかなり浮いているが、目立ちちゃダメなんじゃ？

「あーん」

「……………」

？真横からクリームの乗ったスプーンを突き出してくるマインは、意地でもあーんを成

功させる気だろう。

「・・・・・・・・あーん」

? 埒が明かないので仕方なく応じる。

「~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

? そんな喜ぶ?

? そのままマインはスプーンを自分の口の前に持って行って、一度唾を飲む。そして意を決してスプーンを咥えた。

「ふわっ♡・・・・・・・・これ、いい!」

? パフェには目もくれず一心不乱にスプーンを舐め続けるマイン。そんな異常な姿にも特に驚かなくなってしまった自分に少し凹む。

「マイン、あーん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふえ!?!」

? 目を丸くしているがそんなに驚く事だろうか。

? そつちのパフェをくれたんだし、それに久しぶりに外に出してくれたお礼だ。家の中ばかりで流石に気が滅入りそうだったのだ。

「あ、あーん♡♡」

? マインはスプーンを握る俺の手を掴み逃げられないようにする。

? 顔を紅潮させ息を荒らげる姿は、恥ずかしいというより発情しているように見えてしまふ。

「はむっ」

? おっかなびつくりの俺のパフェを頬張ったマインは、なかなかスプーンから離れてくれない。

「んむっ♡れろ♡♡…♡…♡れえ♡♡はア♡はア♡」

? スプーンを舐め回し最終的には唾液が橋のように糸を引いた。

? なんてお前いちいち扇情的にすんの？

「美味いか？」

「うん♡すっごく、幸せだわ♡♡」

? 味の感想聞いたんだが。

? 終始こんな調子なマインに諦めを抱きつつ、パフェを食べ進める。

? その間マインは俺のスプーンを見て興奮していた。

「次はどこに行こうかしら」

? マインが腕を組んで身を寄せてくる。

? スイーツ店を後にした俺たちは宛もなく街中をさまよっていた。

「………マイン、なんか妙に騒がしくないか?」

? 急に人通りが激しくなる。

? 通り過ぎていく人の顔からは、確かな恐怖の色が見て取れた。

「恐らく公開処刑でしょうね。帝都ではよくあることよ」

? マインの言葉が届くが早い、俺はソレを目にしてみました。

? 磔にされた数人の人間。至る所に矢が刺さっている。

? 死ぬまであそこで苦しみ続けるのだ。

「な、なんて酷いことを………」

? 意識せず口から言葉が零れた。

「ああいうことを平気でやるのが今の大臣。世継ぎ争いで幼い皇帝を勝たせたキレ者よ」

? マインが、磔られ苦しむ人々を鋭い眼光で睨む。

「私は、あんな風にはならないわ」

? マインの瞳の奥で確かな決意が燃えていた。

「——私はねタツミ。革命を成功させて、その功労者として貴方と二人でセレブに暮らすのよ。」

? 異様な雰囲気を纏ったマインがこちらに視線を向ける。

?・・・・・・勝手に俺が人生プランに組み込まれているんですが。

「タツミも私と暮らしたいでしょう?」

? 絡められた腕が、一層強く締まる。

? 恍惚とした、でも何処か歪な笑いを浮かべて、光無い双眸が覗き込んでくる。

「あーんだってしてくれただものね♡タツミも私のこと大好きなのよね♡」

? クスクス、クスクスと、笑い声。

? 何かがおかしい。

? マインの声が遠のいていく。

「これからはずっと、ずーっと一緒にタツミ? ふふふつ、タツミ♡タツミ♡タツミい♡

♡」

? ボヤけた視界が回る。

? あれ? なんて地面が目の前に――。

?
■ ■ ■

? 次に目を覚ました時はナイトレイドのアジトだった。

? ベッドの周りにはボスと好感度上昇組に加えてサヨまで来ていた。

? そして部屋の隅にマインが縄で縛られている。

「くっ、解きなさいよー!!アタシとタツミ恋路を邪魔するっていうのっ!!このー!このー!」

? マインが縄から外れようともがいているが、悪足掻きだ。そもその身体能力がそれ程高くないため、固く結ばれた縄はビクともしない。

「タツミ、眠らされる前のことは覚えているか?」

? ボスが心配そうな目で尋ねてきた。

「……市政調査で公開処刑を見たところまでは」

「ふむ、ではその後の話からしようか」

? ボス曰く、俺があーんさせられた時、強力な睡眠薬も同時に飲まされていたようだ。あーんし返さなければよかったな。

? そして俺が眠った後、マインが俺を誰にも見つからない場所に運び込もうとしたところを、突如現れたレオーネ姐さんにぶっ飛ばされたという。急展開過ぎる。

? レオーネ姐さんは朝起きたらアジトに俺がいないもんだから街中を探し回ったらし

い。

？ちなみにもし公衆の面前じゃなかったら？ライオネル？を使つて殴つてたとはレ
オーネ姐さんの談。

？以上が事の顛末。

「そこでだなタツミ、今後このようなことがないように、お前にはこれを渡しておく」
？ボスが懐から小瓶を取り出す。

？中に数個の丸薬が入つた小さなものだ。

「こいつは革命軍が開発した試作品の対毒薬でな、大抵の毒なら何とかなる。猛毒に
だつてそこそこ効果を發揮するぞ。今回お前が早く起きたのもこの薬のおかげだ」

？ボスが自慢げに話すということはかなり凄い薬なのではないだろうか。

「貰えませんが俺戦闘に出ませんし」

「いやこいつには厄介な副作用があつてな。毒を消した後めちやくちや体が痺れるん
だ。動けないほどではないにしろ、どの道まともに戦えん。実戦投入は現段階では不可
能だな」

？言われてみれば微かに体の感覚が鈍い。服用してからも暫くは寝たままだつたよう
なので、これでもかなり収まつた方なのだろうが。

？毒を解除しても体痺れてたら殺されるか。いや、生け捕りとかの可能性が高まるから

さらに酷い。拷問なんて考えるだけで身の毛がよだつ。

「そういうことなら貰つとくよ。ありがとう」

「ああ」

?ボスから薬を受け取る。使う機会が無いことを祈るばかりだ。

「それよりタツミ、マインとデート行ったんだろ?おねーさんとも行こうぜ」

?レオーネ姐さんが俺の顔を胸で押し潰してきた。

「そ、そうだとタツミ!私も二人つきりでなにかしたいぞ!」

「私もですご主人様」

「おにーちゃん私もー♡」

?アカメ、シエーレさん、サヨも続く。

?今回の件でデートにかなりの抵抗ができたので遠慮したい。

「頼めるかタツミ?このままじゃナイトレイド内で不満が爆発しそうなんだ」

?不満と引き換えに胃が爆発しそう。

「悪いけど遠慮し——」

「よーしじゃあ順番決めジャンケンやるぞー」

?聞いてくださいレオーネ姐さん。ジャンケンしないで。

「……私が勝ちましたあ！」

? シエーレさんが満面の笑みで駆け寄ってきた。

? 眩しい笑顔。顔面エクスタスだ（褒め言葉）。

「やだあ！」

? シエーレさんの幸せオーラを引き裂いて、腹の上に泣きつ面のサヨがダイブしてくる。

「私が最初におにーちゃんとラブラブえ〇ちするの！」

「え? サヨ今なんて——」

? 言い終わる前に、サヨの顔面目掛けて巨大バサミが切り裂いた。

? しかしサヨは身体を引いて危なげなく回避する。

? 言い終わる前に始めないで。サヨ凄いいこと言わなかった? ……いやまさかな。

聞き間違いだろう。てかサヨ避けんのおま。

「それ以上、ご主人様に汚い手で触るな」

「……私いまおにーちゃんとお話してたんだけど」

? サヨとシエーレさんの間に弾ける火花を幻視する。

「おにーちゃん、ちよつとまってね。シエーレさんとお話してくるから」

「ご主人様、少々お待ち下さい。ゴミ掃除をしてみます」

? 視線を交錯させて何を感じたのか、二人は同じタイミングで俺に笑いかけてきた。

? 両者殺伐とした冷気を纏わせながら部屋を出ていく。

? サヨってあんなに怖かったっけ。

「アカメ、レオーネ姐さん、止めてきて」

? とはいえあのシェーレさん相手じゃサヨはひとたまりもないことなど明白だ。(全然そんなことは無い)

「な、何故だタツミ。私はもつとそばに居たいぞ」

「お姐さんも!」

? アカメ達がおねてくる、早くしなければサヨの命すら危ういので行ってもらいたいのだが。

? この状態に入ったアカメ達はそう簡単には動かない。

「止めてきてくれたら頭撫でてあげる」

「行つてきます」

? めつちや簡単に動いてくれた。

? その後しばらく、外から轟音が響き続けることとなる。

「ちよつと縄解きなさいよー!!」

?室内でも甲高い叫びが飛んだ。

?夜、誰もが寝静まった深夜に、アジト内をウロつく人影が一つ。

「うふ♡うふふふ♡♡今回は失敗したけど、次はもつと上手くやるわ。タツミが渡された対毒薬も一個盗ったし、先ずはこの薬が効かない睡眠薬を作らないと。

待っていてねタツミ♡タツミ♡タツミ♡タツミ♡♡♡」

?窓から差し込む月光がピンクのツインテールを濡らす。

?マインはこれっぽっちも反省していなかった……。

シェーレさんと訓練（訓練です。えっちなプレイじゃないです）

? 柔らかな朝日で微睡みから覚める。

? 霞む臉を伸びをして振り払った。

「おはようございます、ご主人様」

? ベッドの横にはシェーレさんが立っている。

? 何故か？彼女が激しいジャンケン勝負の末勝ち取ったからだ。

? 一日限定のタツミ教育係、

? またの名を、

? タツミ独り占め係を。

? ■ ■ ■

「ご主人様には、尋問のやり方について学んでいただきます」

? ナイトレイドの地下には牢屋がある。侵入者用だ。

? そして当然、侵入者から情報を引き出す為の尋問器材も常備している。

? 薄暗い地下牢で毅然と発せられたシエーレさんの一言に、早くもやる気の殆どが削られた。

「俺、尋問とかやったことないんだけど」

「本当ですか!? で、では、は、初めてを頂けるのですね……」

? 顔を赤く染めるシエーレさん。尋問の初めてとは。

「ではまず、私を縄で縛ってください♡」

? 縄を片手に息を荒らげる姿はかなり恐怖を誘う。

? 目に光がないから尚更だ。

? 訓練という名目上真面目にはやる。この組織に身を置く以上は、いつか使う機会が訪れないとも限らん。

「……んっ♡、あ♡♡」

? ただ縄で締め付ける度に声を漏らすのをやめて欲しい。

「はあ♡はあ♡……素晴らしいですご主人様♡」

？両腕を首の後ろで纏めて縛る。そのまま縄を壁のでっぱりに結び付けた。

？この体制では腕に力を込められない。抵抗は不可能だろう。

「あつ♡♡捕まっちゃいました♡♡」

？シェーレさんの虚ろな瞳にハートマークが浮かんでいる。

「で、では、シユチュエーションを決めましょう♡♡そうですね・・・さ、山賊つ

♡♡山賊がいいです♡♡山道で豪華な馬車を襲い、金品一式と貴族の小娘を連れ去った強い山賊♡♡♡という設定で行きましょう♡♡♡♡」

？欲望ダダ漏れじゃねえか。

？もう着いていけないんだけど。俺知らん間に山賊にされてた。

？思い描いていた物からだいぶ外れている、シェーレさんの願望マシマシ妄想。

？というか山賊って捕虜に尋問するの？えっちなことしかない気がするんだけど。

「くっ、離しなさい！私を誰だと心得るのですか!!」

？唐突にシェーレさんが叫びを飛ばした。

？急に始まるじゃん。

「下劣な山賊共め、こんなことしてタダで済まさないわよ!!」

？眉間に鋭くシワを刻むその顔に、普段のおっとり姿は微塵も無い。完全に役に入り込んでる。

? 意外な特技に正直驚いた。

「な、何とか言ったらどうなの!？」

? シエーレさんから言葉を求められる。

? しかし未だ状況に気持ちがいっついていないのだ。どうしようか。

「ん? 何だこれ。『シエーレが教える尋問マニユアル』?」

? 尋問部屋の隅に置かれた机の上に、一枚の紙を見つけた。

? 一番上に、お困りならこれをお読み下さいご主人様。と記載されている。

? どうやらシエーレさんが尋問に慣れていない俺の為に夜な夜な作ってくれたようだ。

? 横で騒いでいる貴族の娘版シエーレさんの言葉を聞き流しつつ、マニユアルを開く。

? まず、捕虜と接する時は常に冷たく、相手に付け入る隙を与えないようにしましよ

う。決して気を許してはいけません。?

? 内容のマトモさに、コレが訓練なのだと思います。

? そうだ、意味不明なシチュエーションは兎も角、真剣に取り組まなくては。

「.....うるせえ小娘だな。身体に教えてやんねえと分からねえか?」

? 冷たい視線を意識しつつ、自分の思う山賊を演じてみた。これ合ってる?

「っ.....あ、貴方のような卑怯者には屈しませんわ!」

? マニユアルを横目で確認。この後の対応を決めなければ。

? 相手が強気な態度をとってきた場合、暴力で黙らせるのが効果的です。痛みとは一番手軽に恐怖を植え付けられる行為です。

? ……訓練といえども本番を意識して本気でやって下さいね??

? いきなり暴力かよ。しかも釘刺されてるし。

? い、いくぞ。いいんだよな? 本当に行くぞ?

「い、いい加減うるせえんだよっ!!」

? シェーレさんの腹に拳を叩き込む。

? 一切の容赦をしなかったのは、マニュアルで言われたからでもあるが、シェーレさんだったらこの位何ともないだろうという信頼があるからでもある。

「おっぐうう♡♡♡♡…ゴホツ、ゴホツ、あ、貴方、よくも…」

? 一瞬シェーレさんの目にハートが宿ったが、直ぐに振り払いキツと俺を睨みつけてきた。

「まだ分からないのか? ん?」

? 先の痛みを思い出させるようにねちっこくシェーレさんの腹をさする。

「ふうっ♡♡あっ♡♡んん♡♡くふあ♡♡や、やめなしいい♡♡♡♡」

? 焦らすような手つきに、早くも演技が途切れ始めた。

? 演技力は凄いの続ける忍耐力がこれっぽっちもないシェーレさんに、若干の呆れを

抱いて腹を撫で続ける。

?ふと、人差し指が彼女のおへそに滑り込んだ。その時、

「んっひゅああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?シエーレさんが聞いたことない叫びを出した。

「.....」

「んひゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ちよ♡♡♡そこっ♡♡♡ほんとにだめっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡やあああ

♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?確認の為再びくりくりほじくると、面白いくらいに叫び散らす。

?シエーレさんは身を蹂躪する快樂の荒波から逃れようと身を捻るが、縛られた縄を揺らすだけで徒労に終わった。

「そ、その♡汚い手を♡離しなしゃい♡♡♡」

?訓練は中断かと思いきや、シエーレさんが最後の意地でお嬢様ロールプレイを何とか繋いでいる。

?しかしその顔は喜びを隠しきれないようで、だらしない蕩け顔だ。

?シエーレさん限界っぽそうだし、さっさと終わらせてしまおう。

?マニユアルの最後の方に目を移す。

?相手が屈しそうになったらラストスパートです。苦痛をチラつかせつつ、言葉で屈

服を誘いましょう。

従えばもう痛くしないというセリフが通常ですが、今回は少し捕虜が特殊なので変えてみましょう。

? 次の言葉を、捕虜の耳元で蔑みを込めて囁いてください。

? 捕虜の耳元でっ、蔑みを込めてっ、囁いてくださいっ!!! . . . ?

? 過去一語気が強い。

? 逆らう理由もないので、シェーレさんの耳に顔を寄せ、そこに記された文を口にする。

? このときおへそを強く押しつけて僅かな痛みを与えることも忘れない。

「あのさあ、口では何とか言ってるけど お前、喜んでるだろ」

「ツツツ ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

? シェーレさんの身体が一際強く跳ねた。

「何? 変態だつて見抜かれて興奮したのか?」

「しょ、しょんなことお ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

? おへそを更に押し潰す。

「んああああツ ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「二丁前に反抗してんじやねえよ おら、負ける、雌犬」

? 限界までへその窪みに親指をねじ込むと、シェーレさんもとい貴族の娘の我慢は遂に

決壊した。

「ま、まっつてまっつてまっつて♡♡まけりゅっ♡♡♡ちゅよい山賊さまにまけちゃううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡ダメダメダメ♡♡♡私貴族なのに♡♡♡山賊さまつよすぎてくつぷくしゆる♡♡♡わからされる♡♡♡だ、だめ♡それだけはほんとにだめ♡♡貴族のほこり失うのやだっ♡♡♡♡」

「そういうのいいから、さっさと落ちろ」

「はひいい♡♡♡いきがってました♡♡わらひいきがってましたあ♡♡♡♡♡貴族のほこり捨てましゅ♡♡♡わらひは山賊さまのあしもとがお似合いだっつてわかりましたあ♡♡♡♡♡今まで間違つてました♡♡♡ちゅよい山賊さまに勝てるわけにやいのに♡♡♡♡♡かんちがいしてましたあ♡♡♡♡♡小娘調子にのつてもうしわけございましてえんでしたあああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「これって尋問の訓練だっけ。完全にアウトな顔しちゃってるよ。」

「シエーレさんは身体をギシギシと揺らし、潤んだ瞳から涙さえ流れ出ていた。」

「山賊しゃま♡♡わらひ、身の程わきまえて犬になります♡♡♡いっしょう山賊しゃまの犬として生きていきますっ♡♡♡♡♡♡♡」

「まさしく犬のように舌を垂らして荒ぶる。」

「ふと縛った腕に目を向けると、縄がくい込んで赤い跡が刻まれてしまっていた。」

? 痛々しい見た目だ。急いで解く。

? 身体の支えが消え、シェーレさんが落ちるように尻もちを着いた。

? 尻に響く痛みと、より増した見下されてる感に更に呼吸を荒くさせると、とあるポーズをとった。

? とても犬らしいポーズ。

? 所謂、ち○ち○というやつ。・・・もうどうしちやつたんだよあんた。

「はっ♡♡はっ♡♡はっ♡♡はっ♡♡山賊しやま♡♡♡ご主人しやま♡♡♡くびわつけてください♡♡わらひを戻れにやくしてくだしい♡♡♡♡」

? 発情度MAXで懇願してくる。虚ろな瞳にハートが爛々と光を放つのが見えた。

「いや、首輪って言ったって・・・ある」

? マニユアルが置かれた机。その奥端で、ひっそりと粗雑な革首輪がこちらを見つめている。

? なんと用意周到なことだろう。訓練が進むと首輪が必要になると分かっていたのか。

? 最初から犬になる気満々じゃん。

? ボロボロの革の首輪を啞然と眺めていると、シェーレさんが「はやくっ♡はやくっ♡」と急かしてきた。

? 犬なのに待てできてないが。

? 渋々と首輪に手をかけ、シエーレさんの首に巻く。

「ごしゅじんさま♡♡♡ごしゅじんさま♡♡♡くうーん♡♡♡くうーん♡♡♡」

? ハートの輝きをより一層弾けさせたシエーレさんが、媚び媚びの鳴き声をあげる。

? 潤んだ瞳が一心に見つめてくるさまは、いやに扇情的だった。

「あ♡♡は♡♡ふ♡♡つ♡♡ 所有物にされちゃつてる♡♡くうーん♡♡くうーん♡♡ごしゅじんさま♡♡♡」

? 首輪なんてつけたことがないから手こずる。ちよつと力加減を間違える度に、シエーレさんは微かな嬌声を奏でた。

? カチャリ、と何とか首輪を装着する。

「は♡♡は♡♡ごしゅじんさま♡♡これからがんばります♡♡♡♡♡た♡♡く♡♡さん、こ♡♡き♡♡つ♡♡か♡♡つ♡♡て♡♡く♡♡だ♡♡し♡♡や♡♡い♡♡つ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

? 相変わらずのち○ち○ポーズでシエーレさんがなんか言ってきた。

? 荒い呼吸を繰り返しながらも、必死に言葉を紡ぐ姿が本当に犬を想起させる。

? 無意識に、

? 本当に無意識に、

帝都までお散歩（直喩）& a m p. 全ての流れを変えるセ リユーちゃん

?ここは、ナイトレイドアジトから帝都に行く途中に存在する森の中。

?木々の隙間から零れた微かな陽光が二つのシルエツトを写す。

?片方は人間。それは分かる。体格からして男だろう。

?しかし、もう片方、人間に追従しているのは・・・獣?

?四足歩行の動物が、男に首輪を引かれて進んでいる。

?そういった感想が出てくるであろう光景だ。そして、草の屋根が晴れその姿があらわになったとき、またこういう感想が出てくるのだろう。

?すなわち、

?ええ?（困惑）

?と。

?俺だつて客観的に今の自分を見れば困惑する。

?だって、レオーネ姐さんが四つん這いで着いてきてるんだもん。

? 四つん這いで、着いてきてるんだもん。四つん這いで……。

? しかも、その首には猛獣でも捕まえるのかという鉄製の首輪がはめられ、そこから鎖が俺の手まで伸びている。

? 半獣化はしていないものの、四足歩行の獣だった。

? 目が完全に飢えた獅子のそれだった。

「どうだタツミ・アタシの方がシエーレよりもペットっぽいだろう?」

? 獣が見せる独占欲と対抗心。手と膝を土で汚しながらも、レオーネ姐さんは嬉嬉として笑顔を浮かべる。

? そう、何故レオーネ姐さんがこんなトチ狂った行動に出たかというと、今朝ホクホク顔で起床してきた首輪付きシエーレさんを見て、全てを悟った上謎の嫉妬を発動したからだ。

? 自分をペットにしてくれと厳いしい鉄首輪を差し出して来た。

? 理由までトチ狂ってる。トチ狂いガールだ。

「もうあんな奴らと話しちゃダメだぞタツミ。タツミの要望は全部おねーさんが叶えてやるから」

? 花咲くような笑顔だが、如何せん瞳に輝きがないため恐怖以外の感情が湧かない。

? くだびれながら足を前に出すと、爪先が盛り出た木の根っこに引つかかった。疲労が

視野を狭くするとは事実のようだ。

「はぐう♡♡」

？俺の身体が前によろければ、当然手に握った首輪も引つ張つてしまふわけで、レオーネ姐さんは唐突かつ乱暴に首を引かれることとなった。

「ご、ごめんレオーネ姐さん」

「た、タツミ♡♡すごい♡今のっ♡♡もつかい♡♡もつかい雑に引つ張つて♡♡♡♡」
 ？ダメだこりや。

？足元に意識を集中させつつも、足を速める。

？向かう先は帝都。買い出しである。

？街にさえ着けば、流石にこの四つん這いプレイも終わりを迎えるだろう。

？希望を胸に、森を急いだ。

？あ、やべ、また根っこだ。

「ひやああ♡♡♡♡♡」

？
 ■■■

? そんなこんなで帝都のスラム街。

? イメージと反してここは活気づいていた。

「ふふん。タツミ、おねーさんがここを案内してやるぞ!」

? 四つん這いから直立二足歩行に進化したレオーネ姐さんが胸を張る。依然として彼女の首では鈍色がギラついているが。

? なんでもスラム街は自分の街も同然なんだと。

? というかレオーネ姐さんが胸を張ったことで、反動で二つのお饅頭が凄いことになっている。

? すげえや。

「先ずはこつちだ!」

? レオーネ姐さんに手を引かれる。

? 全力で幸せオーラを撒く姿を微笑ましく眺めている最中、肩に衝撃が走る。

「あ、すいません」

「.....いえ」

? ぶつかってしまったのは、普通のおじさんだった。

? 咄嗟に謝りを入れるが、返ってきたのは品定めする様な視線と無愛想な返事だけ。
? そのまま直ぐにおじさんは人混みに消えていく。

「? なんかしちやつたかな? まあいいか」

? やけに足早に去って行ったことに疑問が湧くが、そういうことも有るだろうと割り捨てた。

「ほらタツミ、こつちだこつち!」

? 元氣いっぱいいなレオーネ姐さんがグイグイと引いてくるため慌てて着いていく。

? そこでもうやく異変に気づいた。

? ポケットに感じるはずの重さが消えている。

? まさかと思いい手を突っ込むと、案の定財布が消えていた。

「.....今の奴か!」

「ど、どうした? 急に大声上げて」

「金、金取られた!」

「なに!?! タツミのお金を盗むとは許せん!!」

? え? それお前が言うの?

「さっきの男だな? 待っててくれ。直ぐに取り返してやる」

? 制止の暇もなく、レオーネ姐さんがスラムの街に飛び込んだ。

? 完全にアサシンの目で駆けていくが大丈夫だろうか。

? 見えなくなっていくレオーネ姐さんの背中に、先の男の無事を祈るばかりだった。

? ん? あの店で売ってる串焼き美味そうだな。お、こっちもなかなか良さそうだ。

? 鼻腔を突き抜けるスパイシーな香りに、無意識のうちに足が動く。

?

? 迷った。

? あつちの屋台こつちの屋台と彷徨ううちに、帰り道が分からなくなってしまった。

? スラム街で一人はそこそこに危機的状況なのではないだろうか。

? しきりに辺りを警戒する。怖いアンちゃんには近づかないようにしなくては。

「——どうかしましたか?」

「ひいっ!」

? 背後から声が掛かる。

? 反射的に驚いたが、振り返った先にいるのは女性だった。怖いアンちゃんじゃなかつ

た。

? 脳が冷静を取り戻していく。

「す、すみません、そんなに驚くとは」

? 目を丸くする女性。

? 茶髪ツインテールの美人さんだ。

? しかし注目すべきはその服装。軽装の鎧。

「その服は」

「帝都警備隊セリユー！正義の味方です！」

? やはり、警備隊か。アカメ達から危険だから近づくなと口酸っぱく言われた相手だ。

? つまりこの娘は、ナイトレイドの敵。

「きゆううう〜」

? 平静を装いながら最大限の警戒を敷いていると、足元から形容しがたい鳴き声が聞こ

えた。

? なんだこのちっこい生物。

? ヘンテコな二足歩行の犬？的な謎生物が不機嫌そうにこちらを見てくる。

? 威嚇に小さく唸ってさえた。

? よく分かんないけどキレられてる……。

「あの一、ソレは？」

？ヘンテコ生物を指して尋ねる。指を向けられたことで更にジタバタ暴れてらっしやる。

「帝具ヘカトンケイル！ご心配なく、悪以外には無害ですから！」

？所謂、生物型帝具という物か。じゃあ俺とこの帝具の相性が悪いから嫌われてるのだろう。俺も初見ヘンテコって感想が出てきたし。

「ところで、お困りなのは？」

？下から刺さる敵意の視線とは真逆の親切百パー笑顔、敵ということも忘れて癒されそうだ。

「ああいや、道に迷ってしまつて。もといた場所の名前は分かるんですが……」
「それは大変！パトロールがてら、お送りしますよ！……こつちです！はぐれな
いでくださいね！」

？強引に手を取られる。

？女の子らしい柔らかい手。

？でも俺はドギマギしない。この程度のスキンシップ慣れっこなのだ。

？……ドギマギしない。

「ぎゅううううう！！」

?は?別に意識してねえし。変な事言うなしヘカトンケイル。

?下で騒ぐヘカトンケイルことコロを睨みつけたら、更に暴れ具合が上がる。

?怒りボルテージの溜まったコロが、俺の足に体当たりを繰り返す。

?しかしブヨブヨという感触だけで欠片も痛くない。

?無視して歩くその最中、

?唐突に、

?本当に唐突に、

?心臓が大きく鼓動した。

「ぐっ——!?!」

?身体の中が煮え立つ。

?湧き上がる力の本流は、瞬間に肥大化し、最早抑えきれない程まで到達してしまつた。

?他の帝具に刺激されたのか、それとも唯の偶然か。

?遂に限界を超えたその力は、体外へと解き放たれる。

?カーマデーヴァが、暴発した。

「はあ、はあ、．．．．．やばい」

? 全力で抵抗した影響により、酷く疲労感がのしかかるが、そんな事気にかけられる余裕も無い。

? 目の前で俺の手を引く体制のまま微動だにしないセリユーを、固唾を飲んで見つめる。

? 本当にやばい。カーマデーヴアが暴走した。つまりそういうことだ。

? ガクブルに震えていると、無言でセリユーが歩き出した。

? 手を繋がれた状態なので着いていく他ない。

? ただ無言で足音だけがいやに大きく響く。

? 先行するセリユーの背中で、揺れるポニーテールが何故か不気味に感じられる。

? 暫く沈黙の間が続き、セリユーはやがて路地を曲がった。

? 驚く程狭く暗い道に入る。左右を壁に阻まれた窮屈なそこは、分かりやすい程に路地裏だった。

「あ、あのー、セリユーさん?」

「．．．．．こっちの方が近道なんです」

? だいたい溜めた後に、セリユーは短く呟いた。

? 絶対嘘だろ。

「俺、やっぱりこの辺で——」

? 引き攀つた笑顔で緊急離脱を試みた瞬間、握られた手がえげつない力で締め付けられた。

? いだだだだだ!! 折れる折れる!

? 骨の軋む音が聞こえる程に強い力だ。

「大丈夫です! 私に書いてくれば安全ですから! あ、ところでお名前はなんて言うんですか?」

? 決してこちらを振り返らずに声だけ飛ばしてくる。

「た、タツミだけど。辺境出身だから苗字はないよ」

「そうですか、. タツミさん。タツミさん。タツミ・ユビキタス. フフ」

? タツミには知りえないことだが、この時のセリユー——フルネームでセリユー・ユビキタス——は、瞳孔はカッ開いてるし、口端は異常なほど吊り上がってるしで、ドン引き必至の捕食者の顔、又はサイコパス顔だったため振り返れないのだ。

「きゅ〜」

? 先の険悪な振る舞いとは打って変わって、上機嫌に俺の足にコロがしがみつく。

? コロまで懐いたんだけど、カーマデーヴァって異性の好感度上げるんだよな。人型の帝具以外に性別とか無いはずだけど。

「きゅつきゅつきゅ〜」

? 俺の足元で楽しそうにはしゃぐコロを見てみると、そこに含まれているのが、恋愛的感情ではなく信頼のようなものだとは何となく分かった。

? あんな生活を続けると否が応でも愛情には敏感になる。

? 無性相手には信頼度が上がるようにできてるのか？

? ……ふむ、分らん。もう少し情報がないと断定しかねるな。

? カーマデーヴァの能力考察は一旦諦め、この誘拐寸前の状況を打開する方に頭を回すほうが賢明だ。

? まずはこの握り潰さんばかりの手から逃れる。全てはそこからだ。

? 手を軽く引いてみる。

? 凄まじい握力に磨きがかかってしまった。いたい。

? ……これ無理じゃね？

? 最初の壁が果てしなくデカい。無理だ。諦めよう。

? 抵抗が無意味であると静かに悟り、俺はただセリユーの後を追うだけとなる。

? 大人しく誘拐されようと腹を括ったその時、俺の目の前で轟音が炸裂した。同時に粉

塵が舞う。

?一瞬にして視界を遮られたかと思うと、俺の身体が強く後ろに引つ張られた。

?唐突な出来事にセリユーとの手が離れる。

?俺は流れるようにその人に担がれ、入り組んだ路地裏を人外じみた速度で駆け抜けていった。

「れ、レオーネ姐さん?」

?俺を担いで疾走しているのは、半獣化までしたレオーネ姐さんだった。

?どうやらあの状況から俺を救出してくれたらしい。

「タツミ!大丈夫だったか!?警備隊の女に変なことされなかったか!?ごめんタツミ、アタシが離れたばっかりに」

?酷く不安に染まった表情で、自分の不甲斐なさを嘆くレオーネ姐さん。

「別に何ともなかったから大丈夫だよ」

?なるべく穏やかな笑顔を意識して言うが、レオーネ姐さんの不安は拭いきれていなかった。

「あの警備隊の女、確実にタツミに気があった。——チツ、色目使いやがって、アタシの許可無くタツミに触れるなんて許さない。次会ったら確実に殺す……だいたいアカメ達もそうだ。タツミに必死で尻尾振って、本当に醜い。アタシなんだ。タツミの

ペットはアタシなんだ。なのにあの雌共、ことある毎に擦り寄って。ペットはアタシ一人だけなのに。ああ、腹立たい……」

？不穏な言葉を並べ立てた小声の呟きを、俺は微かに聞いとる。

？身震いしながら、俺はレオーネ姐さんに担がれて郊外まで駆けるのだった。

？
■
■
■

？タツミが連れ戻された後、セリユーは活気づくスラム街を鬼の形相で駆け回る。ちなみにコロは引きずられてる。

「クソクソクソクソツツ!!どこに行ったあの女!!私とタツミさんの逢瀬を邪魔しやがって!!本当なら今頃は私の家で愛を囁きあっているはずだったのに……助けなきや。あの女の魔の手からタツミさんを助けなきや。そうだ、タツミさんだって私の助けを待っているはず。待っていてくださいタツミさん!直ぐにセリユーが助けに向かいます。もしそれを邪魔するやつらがいたら

……それなら悪だ。一人残らず殺してやる。

さあ、タツミさんに近寄る羽虫共を全て駆除するために、正義出動だ・・・ア
ハハ♡」